【様式２－２】

# 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
# 実施方法等

【類型Ⅰ】

## １．実践校について

| 実践校名 | （かがわだいがくきょういくがくぶふぞくたかまつしょうがっこう）<br>香川大学教育学部附属高松小学校 | |
|---|---|---|
| 学科名 | 児童・生徒数 | 学級数 |
| | ６２０名 | １９学級<br>（通常学級）<br>１８学級<br>（縦割り学級） |

## ２．実践研究の対象

【社会科】第３学年、第４学年で実施

【縦割り創造活動】１年生～６年生で組織された縦割り学級、計 18 学級（全校生）で取り組む。

## ３．実践研究の実施経過

| 時期 | 実施内容 |
|---|---|
| ５月 | ・縦割り創造活動のプロジェクト活動の立案、社会科の学習につながる部分を整理する校内研修の実施<br>・実社会と連携するための校内体制の整備 |
| ７月 | ・実践研究①<br>「縦割り創造活動　緑１組：お店・農家さん・お客さんをつなぐ野菜で笑顔プロジェクト」<br>・実践研究②<br>「第４学年　社会科　水はどこから」<br>【第１回研究推進委員会】 |
| １０月 | ・前期アンケート調査の実施 |
| １１月 | 【実践校養成訪問】<br>・実践研究③<br>「縦割り創造活動　緑４組：里海をつくる」<br>・実践研究④<br>「第３学年　社会科　火事からくらしをまもる」 |
| １２月 | 【令和３年度連絡協議会】<br>【第２回研究推進委員会】 |
| ２月 | ・１年間の実践の成果と課題を整理する校内研修の実施 |
| ３月 | ・後期アンケート調査の実施<br>（新型コロナウイルスの影響で、当初の予定よりも実施が遅れた） |

## ４．実践研究の実施体制

（１）研究組織

（２）組織概要

① 縦割り創造活動コーディネーターの配置

円滑な運営のために、縦割り創造活動コーディネーターの教員を３名配置する。コーディネーターの役割は以下の通りである。

・各学級の補助をする。学外に出る際などの安全管理のために、児童の管理を行う。
・18 グループの活動が円滑に進められているかについて随時確認をし、助言を行う。
・地域社会の関係者と縦割り学級との連絡調整を行い、日程調整やプロジェクトの進め方の確認等を中心的に行う。
・プロジェクト内容や活動の価値を家庭に定期的に発行する「縦割り創造活動だより」を作成し、保護者の理解を求める。

② 保護者サポーターの募集

本校の保護者に対して、縦割り創造活動サポーターを募り、共にプロジェクトを進める協力体制（縦割りサポーター制度）を組織化する。

③ 研究推進委員会の開催

１年に２回の研究推進委員会を行う。構成員は、学識者と香川大学教育学部教員、本校の全職員とする。研究推進委員会では、授業実践をもとに、実社会とつながる学習プログラムの成果と課題を整理する。また、学識者からの指導・助言をもとに、授業改善を行う。

## ５．教育委員会等として取り組んだ内容

香川大学は６学部を有しており、専門性の高い大学教員も多い。そのため、香川大学教育学部附属高松小学校の「縦割り創造活動」の実施にあたっては、大学教員の専門性を生かした小学校との共同プロジェクトを行うことで、より実社会に即したプロジェクトにできる。また、地域の企業や人材を小学校に紹介すること等の支援を行うことができる。さらに、地域・社会の発展に貢献することを目的に、学生が行う魅力的・独創的なプロジェクト事業（香大生の夢チャレンジプロジェクト）においても、小学校と共同しての活動を展開することも可能である。

今年度は、緑４組「里海をつくる」の活動で、香川大学創造工学部と農学部との一体型プロジェクト、白５組「さぬき提灯」の活動で、学生プロジェクト「TERASU」との一体型プロジェクト、赤５組「どこも　ここも　つながる幸せプロジェクト」の活動で、香川大学と株式会社 NTT ドコモの連携協定のもとでの一体型プロジェクト等、様々な活動を附属高松小学校と共に行った。

また、社会科教育を専門とする大学教員とも連携しながら、縦割り創造活動と社会科の学習が有機的に働く学習プログラムを開発したり、主権者につながる資質・能力を育成するための学習過程の在り方などを共に考えたりなど、大学と附属高松小学校で積極的な連携を行った。

さらに、心理学を専門としている大学教員と連携しながら、今後の持続可能な社会の創り手を育成するために必要な資質・能力を見取るための心理尺度の測定方法に基づいた本校独自のアンケート調査を作成し、子ども・保護者・教師に調査を実施した。そして、調査結果を踏まえた上で、学習プログラムの改善や教師の支援の在り方について共同研究を行った。

【様式２－３】

# 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

【類型Ⅰ】

**実践校名:香川大学教育学部附属高松小学校**

## 研究主題

社会科と異学年集団による社会参画型プロジェクト活動「縦割り創造活動」を通して、今後の持続可能な社会の創り手を目指す研究開発

## 主題設定の理由

本校は、児童数が 600 名を超える中規模校である。高松市の中心部に位置しており、高松市内すべてが校区であるため、バスや電車で通学する子どもも多い。そのため、放課後や休日等に学校の友達と一緒に遊ぶことが少ない。それに伴い、子ども会のような地域同士のつながりも希薄で、地域の大人と関わる機会も少ないなど、実社会とのつながりが不足している現状が見られる。

そのような状況を踏まえ、地域社会とつながることのよさを実感したり、実社会とのつながりの中で様々な体験を味わったりする時間を学校教育の中で保障することが大切だと捉えた。その時間の核となるのが「社会科」であり、それと有機的に関わることが想定されるのは「縦割り創造活動」である。「縦割り創造活動」は、社会とつながるプロジェクト活動において、切実な課題解決の中で様々な成功や失敗を味わう経験を通して、社会参画意識や社会形成に参画する態度を養い、今後の持続可能な社会の創り手を育成することを目指している（「縦割り創造活動」は、総合的な学習の時間と特別活動を統合した領域として設定しており、平成 25 年度から本校独自の教育課程として位置付けている）。

これらの時間を通して、子どもたちは、自分の意見をもちつつ、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わしたり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で合意形成を図っていく。また、重要な場面において、選択・判断を繰り返しながら課題解決を行っていく。こうしたプロセスを通して、主権者として必要な資質・能力を育成することができると捉えた。

それに付け加えて、「社会科」と「縦割り創造活動」の関連も踏まえ、社会科を軸とした学習の補強となるようなプロジェクト活動（実社会とのつながり）の在り方といった視点について、学習プログラムの在り方を構想していく。

また、開発するプログラムが、他地域でも参考となる点については、以下のように考えている。

・小学校段階においての「主権者として必要な資質・能力」の設定
・主権者として求められる資質・能力を育む教育の充実を目指して、教科等横断的な視点で捉えた実践
・主権者として必要な資質・能力につながる教科学習や縦割り創造活動での問題解決プロセス
・実社会とつながった学習展開の有効性
・主権者として必要な資質・能力を育む社会科カリキュラム構想案

## 概要

「社会科を核とした教科学習」の学習プログラムと、異学年集団での社会とつながるプロジェクト活動「縦割り創造活動」の学習プログラムを通じて、小学校段階における主権者として必要な資質・能力の育成や今後の持続可能な社会の創り手を育む学習プログラムを開発する。

## 学習プログラムの主な内容

① プロジェクト活動における問題解決の過程に着目する【縦割り創造活動】

農家の思いも大切にしている高松市にある八百屋さん「ＳＡＮＵＫＩＳ」とつながり、「自分たちのアイデアで八百屋さんの役に立ちたい」、「お客さんのためにも、おいしい野菜を紹介したい」というゴールに向けて活動を行うプロジェクト活動

② 子どもにとって切実性があり、正解が１つでない問いを設定する【第４学年　社会科　11 時間】

水不足の問題がある香川県において、椛川ダム建設の価値を選択・判断する活動を通して、公共事業の意味、公共事業は計画的に行われていることを理解する学習

③ 直接体験と「ひと・もの・こと」との出合いを意図的に設定する【縦割り創造活動】

「香川の海の魅力を発信して、たくさんの人を笑顔にしたい！」というゴールに向かって、様々な「ひと・もの・こと」と出合い、１～６年生が協力しながら瀬戸内海の豊かさを発信していくプロジェクト活動

④ 問題解決の過程で人とつながり、社会のためにできることを選択・判断する【第3学年　社会科　11時間】

火事が発生した際の関係機関の対処の様子を捉え、今後火事による被害を減らすために有効な取り組みはどれか、今後の市の取り組みや自分たちが考えたアイデアから選択・判断する学習

## 学習プログラムの成果の概要

① 実社会とつながるプロジェクト活動において、子どもたちは、様々な成功経験や失敗経験を味わう。その際に、自分の意見だけでなく、他者の意見と折り合いを付けていく中で、選択・判断を繰り返して最適解を導くことで、その課題が解決していく。

② 香川県の水不足問題を踏まえて、どう水と関わっていくべきかという、子どもにとって身近な問題を扱ったこと、また答えが１つではない課題を設定したことで、子どもたちは自分なりの考えをもつことができた。さらに、友達の考えにも触れて議論をすることで、選択・判断を繰り返しながら自分なりの考えをつくり出す状況ができた。

③ 課題を自分事にするために、教師は、子どもたちが年間で直接体験、様々な「ひと・もの・こと」と出合いながら問題解決ができるように、意図的・計画的にしかけを行うことが有効に働く。

④ 「実社会とのつながりで切実な問題をもつ」、「問題解決の過程で、選択・判断する場面を設定する」ことを大切にした段階ごとの学習プロセスを展開し、教師がそれぞれの段階で意図的にしかけを行うことが、主権者として必要な資質・能力の育成につながる。また、縦割り創造活動のプロジェクト活動での学びと社会科の学習の有機的なつながりが、子どもにとって実感を伴った理解へと昇華させる。

【様式２－４】

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（内容）

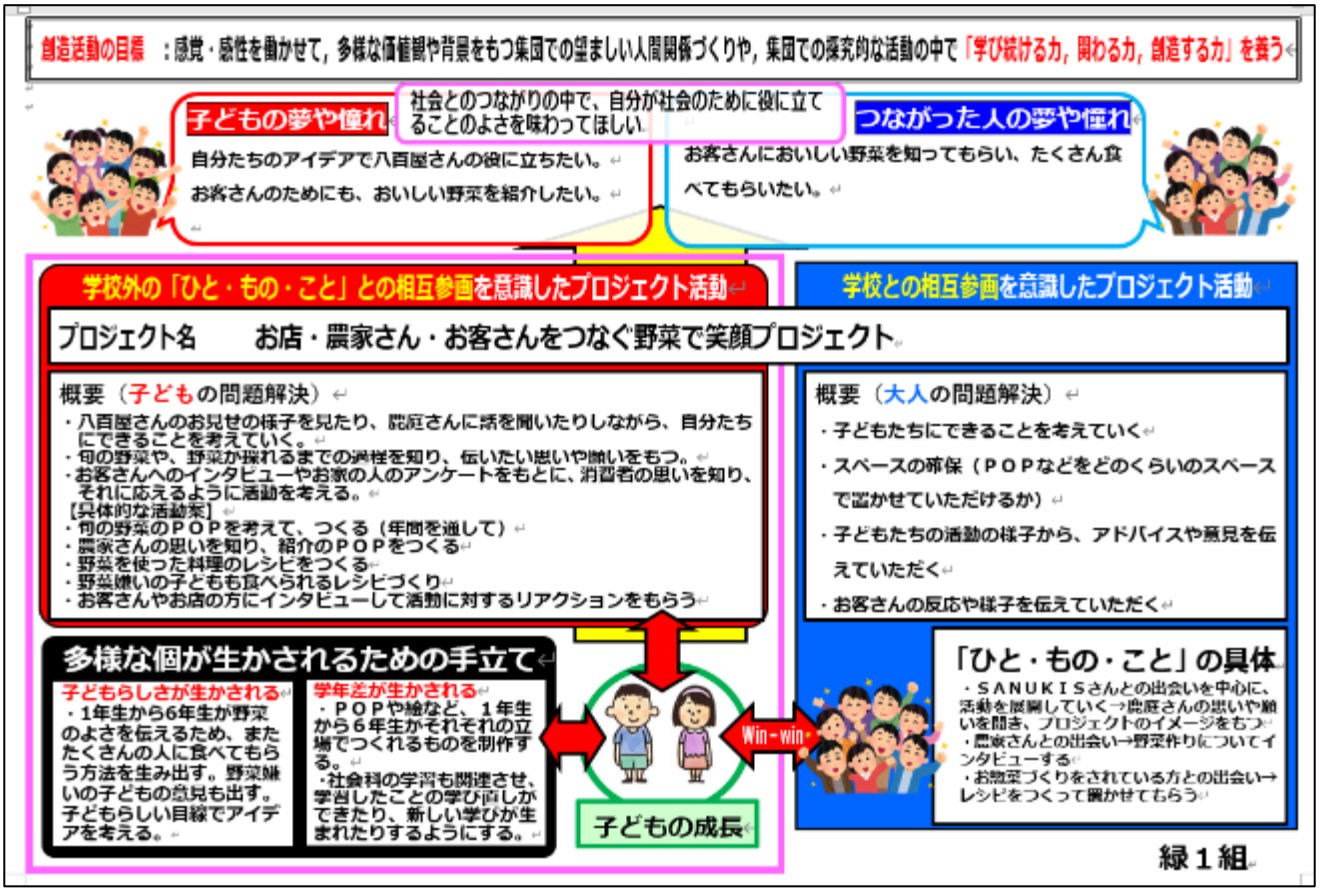
【類型Ⅰ】

香川大学教育学部附属高松小学校

学習活動①　プロジェクト活動における問題解決の過程に着目する

１　プロジェクト名

「お店・農家さん・お客さんをつなぐ　野菜で笑顔プロジェクト」




２　活動の実際

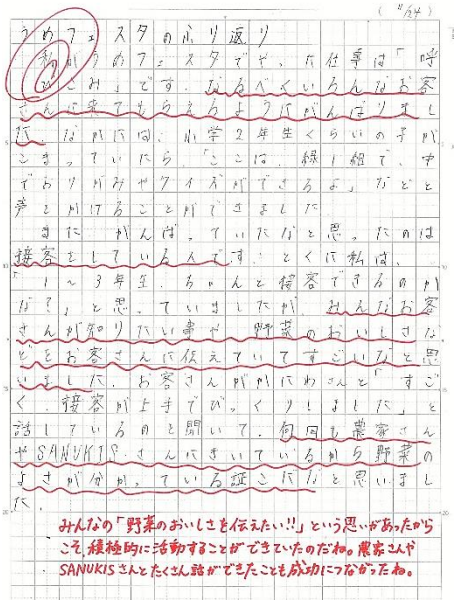
本縦割り学級では、農家の思いも大切にしている高松市にある八百屋さん「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんとつながり、「自分たちのアイデアで八百屋さんの役に立ちたい」「お客さんのためにも、おいしい野菜を紹介したい」というゴールに向けて活動を行うプロジェクトである。さらに、このプロジェクトは、香川県の野菜摂取量が少ないという課題を解決することにもつながっていくと考えている。

活動を進めていくにあたり、子どもたちから「野菜のＰＯＰをつくりたい」という意見が出された。その旨を「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんに伝えると、ＰＯＰにして欲しい野菜をいくつか提示してくれた。子どもたちは、グループに分かれて、インターネットで調べたこと、自分たちが料理して食べた感想や、料理のメニューなど、様々な情報から伝えたいことを選んでＰＯＰづくりに励む姿が見られた。例えば、６年生Ａさん、３年生Ｂくん、１年生ＣさんのグループはきゅうりのＰＯＰづくりを行った。常に３人でアイデアを出しながらＰＯＰをつくっている。３年生のＢくんは、去年生活科で野菜を育てた経験から、生活科で使っていたワークシートを持ってきて、ＰＯＰづくりに生かしている。１年生のＣさんは、

ＳＡＮＵＫＩＳさんのきゅうりがこれまで食べたものよりも随分長かったことを思い出し、イラストに描いた。そのイラストをＰＯＰにも載せようとしていた。６年生のＡさんは３人の意見の折り合いをつけながら、グループの活動をコーディネートしている。また、３人で話し合っても解決できなかったことについて、「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんにも積極的に質問に行くなど、選択・判断を繰り返しながら問題解決する姿が見られた。

全グループのＰＯＰが完成し、「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんへＰＯＰを見せた。しかし「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんからは、「このＰＯＰでは、まだ店に出すことはできない。農家さんの思いや、野菜の良さが伝わらない」という指摘を受けた。子どもたちは、予想外の言葉にショックを受けながらも、自分たちのＰＯＰづくりをよりよくしていくためには、どの情報を取り入れていけばよいか、選択・判断を行っていく場となった。教師は、自分たちのＰＯＰの課題を問いかけ、どのような情報がＰＯＰの中に入るとよくなるかを問うなど、共に考える姿勢を示した。さらに、どの部分は残したいのか問いかけながら、そのグループのこだわりを大切にして、改善点が見付けられるように支援していった。そして、改善されたＰＯＰは、実際に店に置いてもらうことができ、子どもたちは達成感に満ち溢れていた。

１０月には「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんのおいしい野菜を多くの人に知ってもらいたいという思いから、本校の参観日に実際に保護者の方に野菜を売るという活動を行った。これは、子どもたちから出てきたアイデアである。野菜の販売に向けて、異学年で様々なアイデアを出し合い、どうすればお家の人たちが購入してくれるかを話し合う子どもたちの姿は、真剣そのものであった。そして販売当日、保護者に向けて呼びかけを行う１年生の姿、野菜のおいしさの秘密をプレゼンにまとめて発表する６年生の姿など、自分たちができることを考えて主体的に活動をすることができていた。用意をしていた野菜は完売し、「ＳＡＮＵＫＩＳ」さんから感謝の言葉を伝えられた子どもたちは、「自分たちの力で『ＳＡＮＵＫＩＳ』を盛り上げることができた」、「おいしい野菜の秘密を伝えることができた」など、活動が成功した喜びを実感することができていた（右写真は６年生のふり返り）。




子どもたちは、プロジェクト活動において、様々な成功経験や失敗経験を味わう。しかし、その経験を踏まえ、自分の意見だけでなく、他者の意見と折り合いを付けていく中で、選択・判断を繰り返して最適解を導くことで、その課題を解決していくことができた。これは、まさに国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え判断し、行動していくという主権者教育のねらいに合致するものだと考えられる。

さらに、子どもたちは１年間のプロジェクト活動を通して社会を知り、「自分たちの力で八百屋さんの役に立った」「自分たちのアイデアが採用された」という成功経験を味わうことで、「自分たちの力で社会を変えることができる」という実感をもつこともできた。そのような経験ができるようなプロジェクト活動にしていくことが、今後の持続可能な社会の創り手の育成にもつながると考える。

**学習活動②　子どもにとって切実性があり、正解が１つでない問いを設定する**

## １　単元名

第４学年　社会科　「水はどこから」

## ２　目標

○　飲料水は、様々な機関の人が連携し、24 時間いつでも安全で安定的かつ計画的に供給されており、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。

○　新しいダムがつくられている理由について、学んだことをもとに自分なりの根拠をもって説明する。

## ３　関係諸団体との連携について

本単元では、香川用水記念館の方と連携し、学習を進めた。香川用水記念館を見学し、香川県の水の歴史や現状を知ることで、子どもにとって課題がより切実なものになり、水へのかかわり方を自分ごととして考えられるようにした。（詳細は次頁に記載）

## ４　評価規準

| 知識・技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|---|---|---|
| 飲料水を供給する事業は、安全で安定的に供給できるよう進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解している。 | 水資源供給の仕組みや経路、県内外の人々の協力などについて時間的・空間的・関係的な見方で着目し、飲料水供給のための事業の様子を捉え、それらの事業が果たす役割について比較、関連、総合して考えている。 | 人々の健康や生活環境を支える事業について、問いを見出し、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。 |

## ５　単元構成（全１１時間）

**問題をもち、見通しをもつ**

**第１次**　（３時間）
**飲料水の事業について概観し、学習問題と学習計画をつくる。**

①　蛇口の水はどこからくるのかを話し合う。
②　学校の蛇口から出る水がどこからくるかを調べる。
③　調べたことや話し合ったことをもとに、学習問題と学習計画を立てる。

【学習問題】

香川県は昔から水不足に悩まされてきた。しかし、今、私たちは 24 時間 365 日いつでも蛇口をひねるときれいな水が出てくる。なぜだろう。蛇口の水はどこからどのようにして送られてくるのか調べ、今後、私たちはどのように水と関わっていくべきか考えよう。

【学習計画】
Ⅰ　香川県の飲料水事業について調べ、まとめる。
Ⅱ　椛川ダムの事業について調べ、まとめる。
Ⅲ　飲料水の事業について、まとめ、自分なりの解をもつ。

**調べ、考え、表現し、まとめる**

**第２次**　（５時間）
**香川県の飲料水の事業について、調べ、まとめる。**

①　飲料水の事業について、調べ、まとめる。
②　浄水場で水をきれいにする仕組みについて理解する。
③④⑤　香川県の水の流れについて理解する。

**第３次**　（２時間）
**椛川ダムの事業について、調べ、まとめる。**

①　椛川ダムについて調べる。
②　水不足ではないのに新しく椛川ダムをつくるわけを考える。

**つなぐ**

**第４次**　（１時間）
**飲料水の事業について、まとめ、自分なりの解をもつ。**

①　単元を通して分かったこと、思ったことをまとめ、これから未来の香川県にとって大切なことは何か考える。

飲料水は、様々な機関の人が連携し、過去の経験や課題を克服し、24 時間いつでも安全で安定的かつ計画的に供給されている。そのことが、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っている。

## ６　問題解決のプロセスと指導上の留意点

### ⑴　単元の課題をもつ

単元導入では、私たちの生活に欠かせない水について知っていることを、生活経験を踏まえて話し合った。その後、学校の蛇口の水はどこから来ているのかを調べるために、蛇口の後ろにあるパイプをたどりながら、学校内にあるタンク等を見付ける活動を行った。そして、毎日当たり前のように使っている蛇口の水がどこから来ているかも知らなかったことや、香川県の水不足の現状ともつなぎ、「蛇口の水はどこからどのようにして送られてくるのか調べ、今後、私たちはどのように水と関わっていくべきか考えよう」という単元課題を、子どもとともにつくった。香川県の水不足問題を踏まえて、どう水と関わっていくべきかという、子どもにとって身近な問題を扱い、また答えが１つではない課題を設定したことで、単元を通して切実感をもって追究していくことができた。

### ⑵　知識を獲得する

子どもたちは浄水場で水をきれいにする仕組みや香川県の水の流れ、塩江に建設予定の椛川ダムをつくる意味について友達と意見を出し合いながら学習を行った。学習の際には、浄水場の仕組みを関係図でつないで表現物を作成したり、香川用水記念館に実際に行き、香川用水の歴史や水不足を解決する工夫について知ったり、パソコン上で自分の意見を伝えたり（ポジショニング）して、理解を深めていった。自分の考えやその根拠を友達と伝え合う活動を重視することで、根拠をもって主張し、相手を説得する力の育成を図ることができた。

### ⑶　選択・判断する

ここでは、これまでの学び（飲料水の事業は関係機関が連携しながら、計画的に行っていること）をもとに、今後どのように水と関わっていくべきかについて考えた。子どもたちからは、「まずは、節水を心がける」「多くの人の手によって、きれいになった水であることを理解して、感謝の気持ちをもつ」「椛川ダムができても、また水不足のピンチがくるかもしれない。香川県の水を未来につなぐことも考えたい」といった、様々な視点での自分の思いが表出された。答えが１つではない問いに対して、選択・判断する場面を設定したことで、子どもたちは自分なりの考えをもつことができた。さらに、友達の考えにも触れて議論をすることで、選択・判断を繰り返しながら自分なりの考えをつくり出す状況ができた。このように、選択・判断したことをもとに議論することで、多角的・多面的に考察し、公正に判断する力の育成を図ることができたと考えている。

### ⑷　自分なりの解をもつ

これまで学んだことや、友達と話し合ったことを踏まえ、これから未来の香川県にとって大切なことは何かを考えた。単元の課題が子どもたちにとって身近であり、切実なものになっていたからこそ、「水とどうかかわるか」が単元を通して自分ごとになり、自らの行動を見直すきっかけになった。また、自分たちも持続可能な社会の担い手だという自覚をもつことにもつながったと考えている。

学習活動③　直接体験と「ひと・もの・こと」との出合いを意図的に設定する

1　プロジェクト名

「里海をつくる」

2　活動の実際

本縦割り学級では、里海を扱う。瀬戸内海では「海ごみ問題」の知名度が高い。なぜなら、瀬戸内海の海ごみは、日本海や、太平洋にある海ごみと違い、そのほとんどは瀬戸内海に面する県に住む我々日本人が捨てたごみだからである。SDGs(持続可能な開発目標)の 17 目標の内の 14 項目「豊かな海を守ろう」にあるように、身近な海を知り、守ろうとする子どもを育てていくことは大切なことだと考える。そこで、本プロジェクトでは、身近な海である、瀬戸内海との関わりを設定することで、魅力や課題を体験的に発見し、追究していくことを通して、香川の里海づくりの在り方について自分事として捉えて今後の自分の生き方へとつなげていくことをねらいとした。また、社会が抱える問題(現代的課題)を扱うことで、正解のない問題に対して納得解を見出すことになる。正解のない問題解決だからこそ、全員の考えを認めることができ、また、教師が全員の考えを表出する機会を保障することで、一人一人の考えの変容を見取ることもできると考えた。

活動を進めていくにあたり、教師は子どもたちが年間で様々な「ひと・もの・こと」と出合いながら問題解決していけるように、年間の計画を立てた。なお、本プロジェクト活動に関わった主な「ひと」は、以下の通りである。

①　かがわ里海大学　×　香川県環境森林部環境管理課

瀬戸内海に住む水生生物についての資料や知識を教えていただいた。

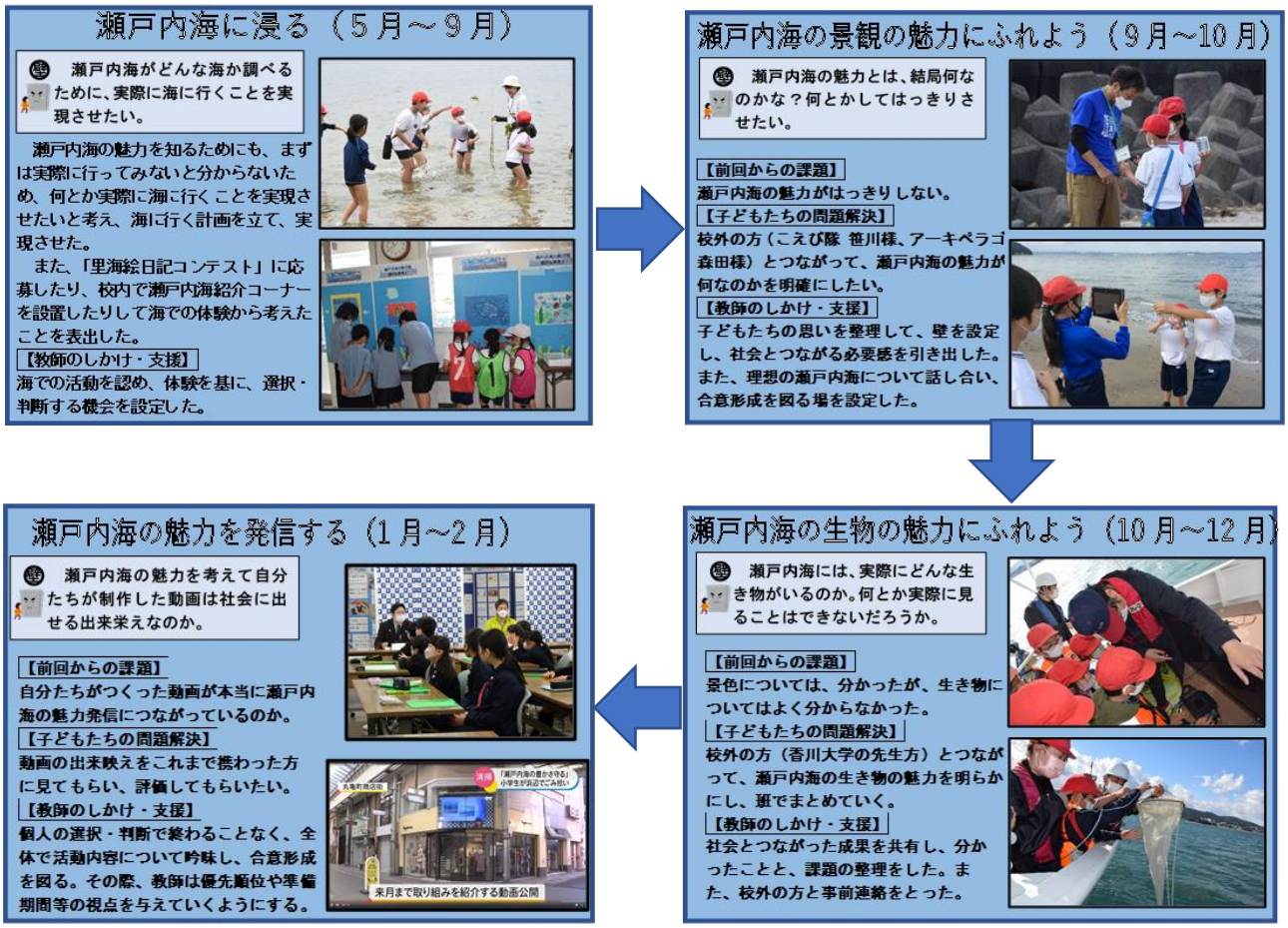
②　里海の景観　×　瀬戸内国際芸術祭サポーターこえび隊　笹川　様

瀬戸内国際芸術祭サポーターをされているこえび隊の方々からは瀬戸内国際芸術祭のテーマである「海の復権」で広めたい瀬戸内海の魅力について、瀬戸内海の景観の美しさについて教えていただいた。

### ③　里海の生物の多様性　×　香川大学農学部、香川大学創造工学部、香川県農政水産部水産課

子どもたちが瀬戸内海の生き物の魅力について知ろうとした際、「かがわ里海大学」として、環境管理課と連携されていた、創造工学部の方とつながったことをきっかけとして香川大学農学部附属浅海域環境実験実習施設での実習をさせていただくことになった。

本プロジェクト活動では、以上のような方々と出合いながら活動を進めていった。なお、年間の概要については以下の通りである。




本実践では、年間を通じて、繰り返し直接体験できる機会を保障した。これによって、子どもたちは学んだことを確かめたり、実践したりすることができる。また、子どもたちの問題解決に合わせて、教師は意図的に「ひと・もの・こと」との出合いを設定した。意図的な「ひと・もの・こと」との出合いによって子どもたちの問題解決が焦点化されたり、問題解決に新たな視点が加わったりする。つまり、教師は問題解決を自分事として捉え、選択・判断していく状況をつくり出すようなしかけを行うことが大切であると考えられる。

本プロジェクトのゴールは、瀬戸内海の魅力を発信して、たくさんの人を笑顔にすることであった。本学級で作成した動画は、香川県の丸亀町商店街にあるテレビに公開されることになり、子どもたちは達成感と共に、様々な「ひと・もの・こと」とのつながりがあったからこそ、動画公開が実現できたことを実感していた。また、子どもたちの感想には、「もっと瀬戸内海の魅力を発信することが大切だと感じた」「瀬戸内海の環境を守るために、まずは自分ができることを実行したい」といった課題を自分との関わりで捉える言葉も多く表出していた。

## 学習活動④　問題解決の過程で人とつながり、社会のためにできることを選択・判断する

### １　単元名

第３学年　社会科　「火事からくらしを守る」

### ２　目標

○　消防などの関係機関の人々は、火災時に緊急に対処する体制をとっていたり、日ごろから防火に努めたりして火災の被害を減らそうとしていることを理解する。

○　より安全な高松市にするために取り組むべきことについて、自分なりの根拠をもって選択・判断し、消防局の方に伝える。

### ３　関係諸団体との連携について

本単元では、学校の近くの消防署の方と連携し、学習を進めた。その際、縦割り創造活動「自分でいのちをまもるくん」との関連を図ることで、単元を通して子どもたちが実社会とつながることのよさを実感できるようにした。（詳細については次頁に記載）

### ４　評価規準

| 知識・技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|---|---|---|
| 消防署などの働きについて、調査したり地図などの資料で調べたりすることを通して、関係機関は相互に連携して緊急時に対処する体制をとっていることや、地域の人々と協力して火災や事故の防止に努めていることを理解している。 | 関係機関や地域の人々の諸活動を、時間的、空間的、関係的な見方で捉え、関係機関の相互の関連や、従事する人々の働きについて比較、関連付け、総合して考え、より安全な高松市にするための方法について、根拠をもって選択・判断している。 | 地域の安全を守る働きについて問いをもち、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。 |

### ５　単元構成（全１１時間）

**問題をもち、見通しをもつ**

**第１次**　（３時間）
**実際に起きた工場火災について知り、単元の課題をつくる。**

① 高松市で起きた火災のニュースを見て、知っていることや感じたことを話し合う。
② **高松市消防局の方**から、高松市の火災現況や火災の恐ろしさについて話を聞く。
③ 実際に起きたＡ町の火災について知り、単元の課題をつくる。

【学習問題】
高松市の火災による被害を減らすにはどうすればよいのだろう。実際に起きた工場火災の時の対処や、その後の対応について調べたことをもとに考えて、消防局の方に提案しよう。

【学習計画】
Ⅰ　火災に対する対処や、その後の防火の取り組みについて調べる。
Ⅱ　高松市の火災の被害を少なくする取り組みを考え、最適解を話し合う。
Ⅲ　考えた方法を消防局に提案する。

**調べ、考え、表現し、まとめる**

**第２次**　（５時間）
**火災に対する対処や、その後の防火の取り組みについて調べる。**

① 実際に起きた工場火災の時の関係機関の働きについて、時系列の表から調べ、気付いたことを話し合う。（時間）
② 火災が起きた際の連絡体制を、関係図に整理する。（関係）
③ 高松市の消防施設の配置と、火災時の対応について、地図に整理する。（空間）
④ **高松市消防局の方**から、消防署が取り組んでいることや、高松市がこれまで取り組んできたことについて話を聞く。
⑤ 被害をより減らしていくために、課題となるところはどこかを話し合う。

**第３次**　（２時間）
**高松市の火災の被害を少なくする取り組みを考え、最適解を話し合う。**

① 火災の被害を減らす取り組みについて、自分なりの解と根拠をもつ。
② 友達と話し合い、最適解を見出す。

**つなぐ**

**第４次**　（１時間）
**考えた方法を消防局に提案する。**

① みんなで決めた取り組みを、消防局の方に提案する。

消防などの関係機関の人々は、火災時に緊急に対処する体制をとっていたり、日ごろから防火に努めたりして火災の被害を減らそうとしている。より安全な高松市にするためには、関係機関だけでなく、自分たちもふくめ地域の１人１人が、安全を守るためにできることを考えることが大切だ。

## ６　問題解決のプロセスと指導上の留意点

### ⑴　単元の課題をもつ

単元導入では、創造活動の際のつながりを生かして、高松市消防局の方に市の火災件数の推移や、火災の恐ろしさ等について話をしていただいた。直接話が聞けたことで、「火災はこわい」といった実感や、「火災による被害を少なくしたい」という切実な思いをもつことができた。そして「高松市の火災被害を少なくするためにどうすればいいか、一緒に考えてほしい」と投げかけてもらったことで、単元の終末に、考えたことを提案するというゴールの見通しをって追究を進めることができた。また、縦割り創造活動で消防局の方とつながっていたことが効果的にはたらき、子どもたちは「自分たちでなんとかしたい」という使命感をもって考えようとしていた。

### ⑵　知識を獲得する

ここでは、課題に対する自分なりの根拠（判断基準）をもって考えを表現できるようにすることを大切にした。そこで、消防署の見学を行い、課題解決に向けて必要な知識を獲得できる状況をつくった。そうすることで、子どもたちは知りたいことを自ら消防署の方にインタビューし、火災時の対処についてより深く理解することができた。このように、見学等を通してより実感を伴った知識を獲得することで、選択・判断する際の自分なりの判断基準をつくっていくことができたと考えている。

### ⑶　選択・判断する

火災の被害を減らし、より安全な高松市にするために必要な取り組みを考え、それらの取り組みを比較することを通して、優先順位を話し合う活動を行った。その際、教師は子どもたちの考えの根拠を引き出すような問い返しをしたり、取り組みの有効性を比較することを促したりしながら、学級みんなが納得して消防局に提案する取り組みを選べるように心がけた。単元を通して実際に消防署の方に話を聞く機会を保障しておいたからこそ、話し合いでは「消防署の〇〇さんが～と言っていたから…」と自分が聞いたことを根拠に、自信をもって考えを述べることができた。

このことから、問題解決の過程で実社会とのつながりを重視することで、自分なりの根拠をもって主張する力や、多様な意見をもとに合意形成する力の育成を図ることができたと考える。また、導き出した最適解を、実際に消防局に提案するというゴールを設定しておいたことで、市民として、主権者として、よりよい社会をつくっていこうとする態度を養うことにもつながったと考えている。

### ⑷　自分なりの解をもつ

これまで学んだことや、友達と話し合ったことを踏まえ、最終的な自分なりの解をつくり、消防局の方に意見文として伝えた。そしてその意見文に対して、消防局の方からフィードバックをもらったことで、子どもたちは「社会の役に立つことができた」という有用感を感じることもできた。これらの活動を通して、社会の形成に参画する資質や能力の基礎を育むことができたと考えている。

# 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（成果と課題）

【類型Ⅰ】

## 香川大学教育学部附属高松小学校

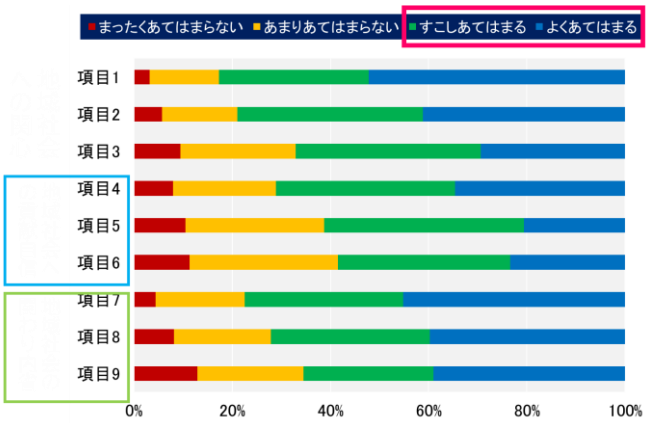
**成　果**

（児童生徒の変容等）

○　本実践では、小学校段階における主権者教育につながる資質・能力について、今年度の取り組みを通して、本校では、「自ら参画しようとする意欲」「合意形成・意思決定する力」「多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」「根拠をもって主張し、他者を説得する力」の４つと捉え、実践を行った。そして、社会参画意識や社会形成に参画する態度を見据えた評価項目について、本校教員と香川大学教員が連携して１学期に社会参画に関わる３つの側面（地域社会への関心、地域社会への貢献の自信、地域社会とかかわることによる内省）を踏まえた評価項目を作成し、10 月に本校の３年生以上の子どもに実施を行った（後期については、新型コロナウイルスの影響もあり、実施が３月になる）。質問紙調査とデータについては、以下の通りである。

| ３．教科の授業や縦割り創造活動のときに、地域の人と話したり、いっしょに活動したりすることがあります。そのなかで、次のことをどれぐらいかんじますか？　それぞれの質問について、「まったくあてはまらない（1）」～「よくあてはまる（4）」から１つを選んで丸をつけてください。 | まったくあてはまらない | あまりあてはまらない | すこしあてはまる | よくあてはまる | |
|---|---|---|---|---|---|
| ①学校外の人と話したり、いっしょに活動したりするのはたのしい | 1 | 2 | 3 | 4 | 地域社会への関心 |
| ②地域や社会のできごとに関心がある | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| ③どうすれば地域や社会をよりよくできるかについて、考えている | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| ④わたしは、学校外の人とうまく協力することができるとおもう | 1 | 2 | 3 | 4 | 地域社会への貢献の自信 |
| ⑤わたしは、地域の人の役にたつことができるとおもう | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| ⑥わたしががんばることで、地域や社会をよりよくしていくことができるとおもう | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| ⑦学校外の人と話すなかで、自分にとって大切だと思うことがあった | 1 | 2 | 3 | 4 | 地域社会とかかわることによる内省 |
| ⑧学校外の人と話すなかで、自分の考えが広がった | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| ⑨学校外の人と出会って、自分の将来のことを考えた | 1 | 2 | 3 | 4 | |

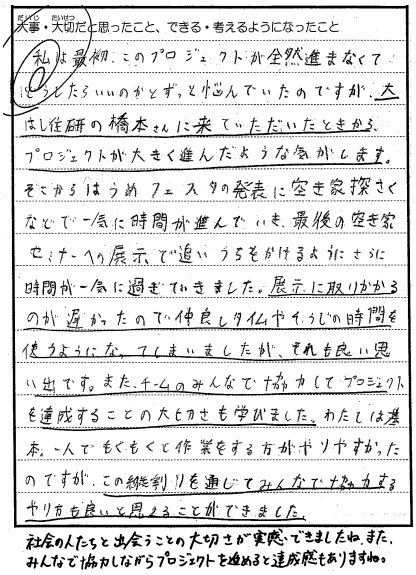
【児童質問紙調査】



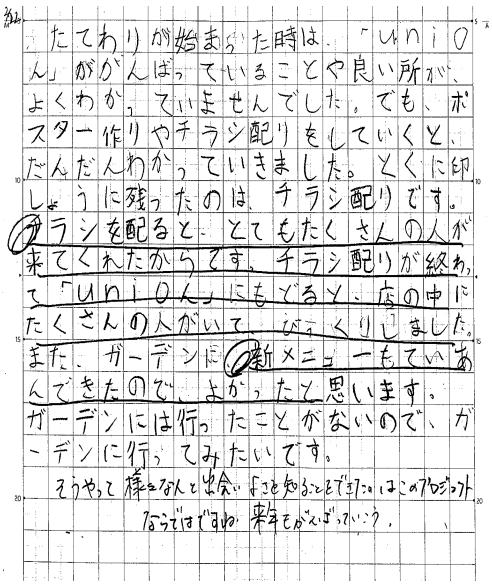

【アンケート結果（１０月）】

アンケート結果が示すように、３つの側面において肯定的に回答している割合はとても高い。この結果を踏まえると、縦割り創造活動や社会科での学習が、社会参画意識や社会形成の態度を育てることにつながったと考えられる。

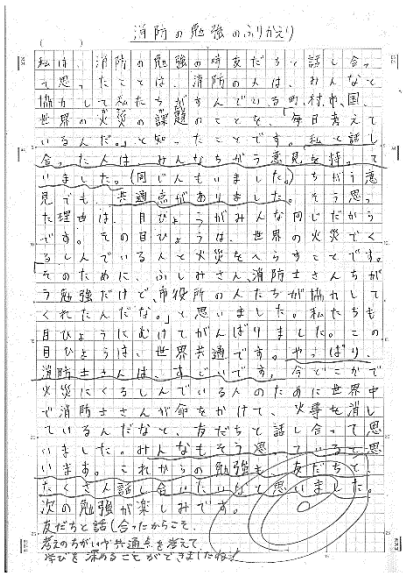
さらに、子どものふり返り（下写真参照）のノートからも、「実社会とつながることのよさ」、「友達の様々な意見から取捨選択し、自分ができることを考えることの楽しさ」「自分の力で地域や社会を変えられることの実感」等が書かれており、子どもの変容が伺える。




【６年生のふり返り】




【４年生のふり返り】




【３年生のふり返り】

○　以下は、本年度の実践をふり返った２名の教師の言葉である。授業や活動の中で、実社会とつながることの重要性、社会参画意識や社会形成の態度を育てる意識をもった上での授業づくりの必要性を述べており、教師自身の授業観の変容が明らかになった。

縦割り創造活動で、男木島の小・中学校やコミュニティ協議会、高松市役所の観光交流課など多くの方々と協働してプロジェクト活動を行った。実社会とつながることで、子どもの意欲や解決したいという思いが高まり、異学年で様々なアイデアを出しながら課題解決する姿を間近で見ることができた。プロジェクト活動では、失敗経験も多くあったが、プロジェクトのゴール（男木島を盛り上げたい）を何とか解決したいという思いをもち、様々な意見を取捨選択しながら壁を乗り越えていく子どもたちの姿を見て、「自分たちの力で地域を動かすことの面白さ」を実感できるような活動にしていくことの大切さを改めて感じた。　（本校４年目　道徳科教員）

実際に市役所や消防局、地域団体の方など、社会で活躍している人に来ていただいたことで、子どもたちにとって単元の課題が切実なものになり、主体的な問題解決につながったと実感している。また、資料で調べることに加えて、現場のリアルな声を聞けたことで、実感を伴った学びにつながり、選択・判断する際に、その学びとつなげて根拠を述べる姿が多く見られた。このような子どもの姿から、授業づくりにおいて実社会とのつながりを教師が意図的にしかけることで、より深い学びにつながることを強く感じた。実社会とつながっているからこそ、子どもの選択・判断がより現実味を帯び、世の中の課題に対して公正に判断する力を育むことにもつながると実感することができた。

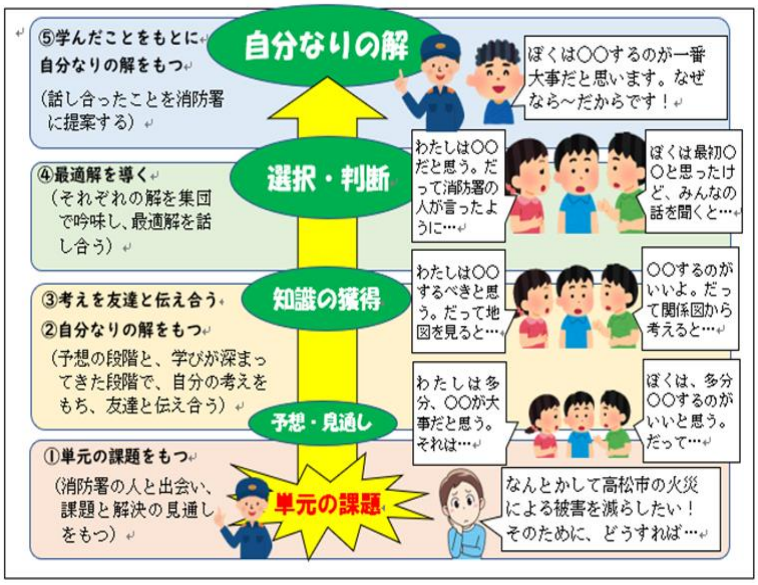
（本校３年目　社会科教員）

（取組の工夫）

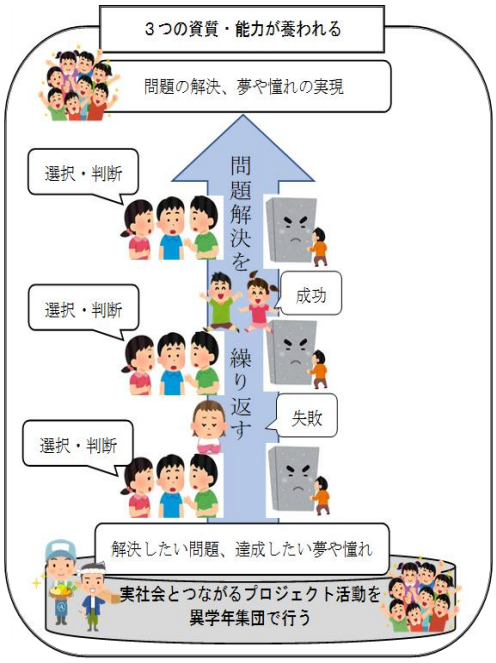
○　子どもたちが地域や社会生活における具体的な課題等を自分との関わりの中で捉えられるようにするために、「水不足の問題」「野菜摂取量不足の問題」「瀬戸内海のごみ問題」等、香川県内における諸課題を学習の核として扱い、学習プログラムを作成した。

○　学習指導要領において、「実社会の課題は、様々な事象が絡み合っていることから、特定の学問分野を越えた多様な概念の中から、相互の関連性について学ぶことができるようになり、教科等横断的な知識を身に付ける上でも有効である」ことが述べられている。本校では、縦割り創造活動と社会科を中心とした教科学習との接続を図る（教科等横断的な視点）ことで、子どもの学びを深めることができた。また、主権者として必要な資質・能力を育む社会科カリキュラム構想案を本校版として作成した（別紙①参照）。この構想案は、社会科のカリキュラムにおいて、①地理的内容②歴史的内容③公民的内容に分類した上で、主権者として必要な資質・能力へつなぐ社会科の授業実践と、縦割り創造活動のプロジェクト内容とのつながりを整理したものである。学年ごとのカリキュラム案ではなく、地理・歴史・公民といった分野ごとのカリキュラム案にした意図は、学年を越えた学びの連続性を意識し実践を行うことが、主権者としての資質・能力の育成にとって有効だと考えたからである。

○　小学校段階において主権者に求められる資質・能力の育成をするためには、「１人１人が自分の意見をもちつつ、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わしたり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で、選択・判断を繰り返して合意形成を図っていくプロセス」が必要であると捉えている。そのプロセスが実現できるように、社会科と縦割り創造活動において、以下のような問題解決プロセス図を作成して実践を行った。




図①「主権者教育につながる教科学習の問題解決プロセス」




図②「主権者教育につながる縦割り創造活動の問題解決プロセス」

○　香川大学との連携を積極的に行った。大学教員の専門性を生かした共同プロジェクト、大学生との共同プロジェクトなど、香川大学との一体型プロジェクトを行うことで、より実社会に即した専門性の高いプロジェクトになるようにした。さらに、地域の企業や人材を、大学教員から積極的に紹介してもらうことで、プロジェクトの活性化を図った。

別紙①

# 主権者としての資質・能力を育む社会科カリキュラム全体構想案

| | | |
|---|---|---|
| 目標 | 学校 | 学び続ける力・関わる力・創造する力 |
| | 教科 | 学びに向かう力、人間性等　思考力、判断力、表現力等　知識及び技能 |
| | 主権者 | 自ら参画しようとする意欲、合意形成・意思決定する力、多面的・多角的に考察し、公正に判断する力、根拠をもって主張し、他者を説得する力 |

| | 内容Ⅰ　くらしと国土・産業 | 内容Ⅱ　くらしと政治・文化 | 内容Ⅲ　くらしと健康・安全 |
|---|---|---|---|
| 第3学年 | わたしのまち　みんなのまち<br>■学校のまわり<br>■高松市のようす<br>はたらく人とわたしたちのくらし<br>■農家の仕事／工場の仕事<br>■店ではたらく人 | 高松市と人々のくらしのうつりかわり | くらしを守る<br>■火事からくらしを守る<br>■事故や事件からくらしを守る |
| 第4学年 | わたしたちの県<br>■日本地図を広げて<br>■香川県の広がり<br>特色ある地域と人々のくらし<br>■国際交流が盛んな直島町<br>■うちわをつくるまち・丸亀<br>■自然を生かしたまちづくり三豊市 | きょう土の伝統・文化と先人たち<br>■残したいもの　伝えたいもの<br>■ふるさとの発展につくした人 | 住みよいくらしをつくる<br>■水はどこから<br>■ごみのしょりと利用 |
| 第5学年 | わたしたちの国土<br>■世界の中の国土<br>■国土の地形の特色<br>■低い土地のくらし／高い土地のくらし<br>■国土の気候の特色<br>■あたたかい土地のくらし／寒い土地のくらし<br>わたしたちの生活と食料生産<br>■くらしを支える食料生産<br>■米づくりのさかんな地域<br>■水産業の盛んな地域<br>■これからの食料生産とわたしたち<br>わたしたちの生活と工業生産<br>■くらしを支える工業生産<br>■自動車をつくる工業<br>■工業生産を支える輸送と貿<br>■これからの工業生産とわたした<br>情報化した社会と産業の発展<br>■情報産業とわたしたちのくらし<br>■情報を生かす産業<br>■情報を生かすわたしたち<br>わたしたちの生活と環境<br>■わたしたちの生活と森林 | | わたしたちの生活と環境<br>■自然災害を防ぐ<br>■環境を守るわたしたち |
| 第6学年 | 世界の中の日本<br>■日本とつながりの深い国々 | わたしたちの生活と政治<br>■わたしたちのくらしと日本国憲法<br>■国の政治のしくみと選挙<br>日本の歴史 | わたしたちの生活と政治<br>■子育て支援の願いを実現する政治／震災復興の願いを実現する政治 |
| | | 世界の中の日本<br>■世界の未来と日本の役割 | |
| 中学校社会科へつなぐ | | | |

## ❑内容Ⅰ 「くらしと国土・産業」・・・「持続可能な社会」の創り手を育てるために

～くらし(経済)の中で、国土環境(自然環境・社会環境)保全、資源の活用を図る人づくり～

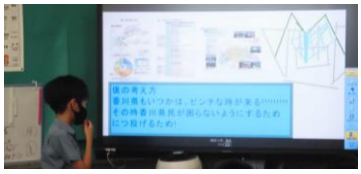
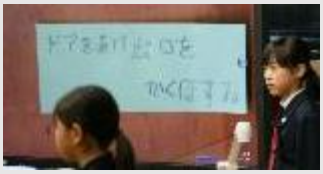
| | 内容Ⅰ くらしと国土 | 主権者としての資質・能力へつなぐ | 創造活動とのつながり |
|---|---|---|---|
| 第3学年 | わたしのまち みんなのまち<br>■学校のまわり<br>■高松市のようす<br><br>はたらく人とわたしたちのくらし<br>■農家の仕事／工場の仕事<br>■店ではたらく人 | ■わたしたちのまちと高松市<br>高松市について人口、交通、地形、土地利用、古くから残る建物の視点で調べたことをもとに、高松市のよさが伝わるサイクリングコースを構想し発信する。(R1実践)<br><br>■ 農家のしごと<br>これからの農業は、様々な人と協力しながら、生産者と消費者がつながり、安定して稼げる仕組みを整え、おいしい農作物を作っていくこと方策を、複数の取り組みを選択・判断しながら自分なりの考えをもつ。(R2実践) | ●緑3組 インテリアコーディネーター<br>新店舗のコーディネートプロジェクト<br>●白3組 空き家ミッション<br>高松市の空き家問題解決プロジェクト<br>●白5組 さぬきに光をともし隊<br>さぬき提灯を活用し地域活性化プロジェクト<br>●赤4組 きらきらカレンダー<br>魅力を発信するカレンダーで地域をもりあげるプロジェクト<br> <br>海の近くにある「うみまち商店街」を訪れ、商店街のすてきを探し、カレンダーを作成して、地域に配布します。 |
| 第4学年 | わたしたちの県<br>■日本地図を広げて<br>■香川県の広がり<br><br>特色ある地域と人々のくらし<br>■国際交流が盛んな直島町<br>■うちわをつくるまち・丸亀<br>■自然を生かしたまちづくり三豊市 | <br>生産性を高めている農家の具体的な取り組みから、他の農家も取り入れるべき方策を選択・判断する。<br><br>■香川県の特色あるまちづくり<br>県内の特色ある地域のまちづくりのようすを捉え、移住希望者に伝える地域の魅力を選択・判断し、ランキング等に表現し実際に提案する。(R2実践) | <br>実際に県内の農家さんを訪れ、農家さんの思いや工夫を知り、活動に生かします。 |
| 第5学年 | わたしたちの国土<br>■世界の中の国土■国土の地形の特色<br>■低い・高い土地のくらし■国土の気候の特色■あたたかい土地のくらし／寒い土地のくらし<br>わたしたちの生活と食料生産<br>■くらしを支える食料生産■米づくりのさかんな地域<br>■水産業の盛んな地域■これからの食料生産とわたしたち<br>わたしたちの生活と工業生産<br>■くらしを支える工業生産■自動車をつくる工業<br>■工業生産を支える輸送と貿易■これからの工業生産とわたしたち<br>情報化した社会と産業の発展<br>■情報産業とわたしたちのくらし ■情報を生かす産業<br>■情報を生かすわたしたち<br>わたしたちの生活と環境<br>■わたしたちの生活と森林 | ■ わたしたちの生活と食料生産<br>食糧自給率の低下や農業に関わる人の減少など、食料生産が抱える課題を解決するための方法を考え、その中から大切だと思うものを選択・判断し、ランキングに表現する。<br>■ 情報化した社会と産業の発展<br>情報化社会のよさや課題を捉え、よりよい社会や産業の発展に向けた情報活用の在り方を考えたり、情報と自分との関わり方を選択・判断したりする。<br> <br>新聞・広告を軸に、多様なメディアの長所と短所を捉え、そして情報と自分たちとの関わりを選択・判断した。 | ●白４組 残飯ゼロプロジェクト<br>「残飯を減らすために何ができるか？」一人一人が課題意識をもち、毎日の残飯の計量や廃棄も含め、日々活動しています。食品ロス削減の輪を広げます。<br><br>● 赤5組 みんな幸せ 赤5 IT研究所<br>NTT ドコモや香川大学との連携により、情報の活用方法や情報格差をなくす取り組みを考え、提案するプロジェクト<br> <br>高齢者が安心して暮らせるための情報活用方法について、現在模索中です。 |
| 第6学年 | 世界の中の日本<br>■日本とつながりの深い国々<br>世界の中の日本<br>■世界の未来と日本の役割 | ■ 未来へ向かうコロナ時代の国際協力(R4実践)<br>青年海外協力隊の方との交流を通して、日本が担うべき国際協力の在り方について考えを広げると共に、今後、国際社会で日本人として必要な力・考え方を構想することができる。 | |
| 中学校社会科へつなぐ | | | |

## ❑内容Ⅱ 「くらしと政治・文化」・・・私たちの「伝統・文化」を守り、受け継ぐために

～国際社会、国家、地域社会の一員としての自覚と責任をもち、行動できる人づくり～

| | 内容Ⅱ くらしと政治・文化 | 主権者としての資質・能力へつなぐ | 創造活動とのつながり |
|---|---|---|---|
| 第3学年 | 高松市と人々のくらしのうつりかわり | <br>高松市の移り変わりや高松市が抱える課題を捉え、今後の市の在り方について構想する。<br>■ 高松市のうつりかわり（R4実践）<br>高松市の移り変わりや市が抱える課題（空き家問題も含む）について、多様な視点から捉え、今後の高松市のよりよい在り方について構想する。 | <br>中心市街地の人口減少による空き家問題に対して、自分たちができることを考えます。<br>●白3組 空き家ミッション<br>高松市の空き家問題解決プロジェクト |
| 第4学年 | きょう土の伝統・文化と先人たち<br>■残したいもの 伝えたいもの<br>■ふるさとの発展につくした人 | ■ 香川県「独立の父」中野武営（R4実践）<br>郷土の偉人「中野武営」について調べる活動を通して、先人たちが計画を立て様々な苦心や努力を重ねてまちづくりを実現したことを理解するだけでなく、政治に関わる人々の思いや願いに対して共感することができる。 | ●赤2組 KU MI KO Z<br>高松市の伝統工芸組手細工の魅力を PR するプロジェクト<br> <br>組手細工の職人さんとつながり、PR につながる組手のデザインや商品を考案します。<br>●白5組 さぬきに光をともし隊<br>さぬき提灯を活用し地域活性化プロジェクト |
| 第5学年 | | | <br>さぬき提灯を広めるために活動している香川大学の学生サークル TERASU と協同でさぬき提灯を作成しました。 |
| 第6学年 | わたしたちの生活と政治<br>■わたしたちのくらしと日本国憲法<br>■国の政治のしくみと選挙<br>↓<br>日本の歴史<br>↓<br>世界の中の日本<br>■世界の未来と日本の役割 | ■国の政治のしくみと選挙 | |
| 中学校社会科へつなぐ | | | |

## ❑内容Ⅲ 「くらしと健康・安全」・・・私たちの「いのち」と「くらし」を守るために
## ～住みよいくらし（健康・安全）づくりに参画できる人づくり～

| | 内容Ⅲ　くらしと健康・安全 | 主権者としての資質・能力へつなぐ | 創造活動とのつながり |
|---|---|---|---|
| 第3学年 | くらしを守る<br>■火事からくらしを守る<br>■事故や事件からくらしを守る<br>↓ | ■ 地域の安全を守る（消防）<br>火事が発生した際の関係機関の対処の様子を捉え、今後火事による被害を減らすために有効な取り組みはどれか、今後の市の取り組みや自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。<br>（R3 実践） | ● 白2組(R2)いのちをまもるくん<br>自分たちのいのちを守るためにできることを考え、実行するプロジェクト<br> <br>学校防災アドバイザーや防災士の方と一緒に、学校の避難訓練を改善し、実行しました。 |
| 第4学年 | 住みよいくらしをつくる<br>■水はどこから<br>■ごみのしょりと利用<br>↓ | ■ わたしたちのくらしを支える事業（水）<br>椛川ダム建設の価値を選択・判断する活動を通して、公共事業の意味、公共事業は計画的に行われていることを理解する。（R3実践）<br>  <br>市民にとっての椛川ダムの価値について吟味し、公共事業のよりよい在り方を捉えていきました。<br>■ 自然災害からくらしを守る<br>香川県の風水害の事例から、人々をを守る関係機関の働きを捉え、災害時に自分たちがとるべき行動を構想する。（R1 実践） | <br>ビニールシートと支柱のみでのテント作り。自助の大切さを、体験を通じて学びました。<br>● 赤5組　自然とふれあうサバイバル体験<br>災害時や遭難時に自分の命を守るための方法を体験を通じて身に付けていくプロジェクト。 |
| 第5学年 | ↓<br>わたしたちの生活と環境<br>■自然災害を防ぐ<br>■環境を守るわたしたち |  <br>災害行動メモ「みまも～る」をよりよいものにするため、どんな内容を追加すべきか話し合った。<br>■ 環境を守るわたしたち（R4実践）<br>瀬戸内海の環境を保全するための有効な取り組みはどれか、今後の市や県の取り組み等も考慮し、自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。 | ● 白1組　五色台白1ワールド<br>五色台の自然環境を様々な体験を通して学び、五色台の活用方法を提案する。<br> <br>五色台を訪れ、自然を体感するアクティビティを通して、自然の魅力を肌で感じました。 |
| 第6学年 | わたしたちの生活と政治<br>■子育て支援の願いを実現する政治／震災復興の願いを実現する政治<br>世界の中の日本<br>■世界の未来と日本の役割 | ■ わたしたちのくらしと政治<br>（震災復興の願いを実現する政治） | |
| 中学校社会科へつなぐ | | | |

（他地域でも参考となると考えられる点）

○　小学校段階における主権者教育につながる資質・能力については、子どもたちの実態を踏まえた上で、各学校で設定し、主に社会科の授業を通して育成することを目指していくことが必要である。

○　主権者教育につながる資質・能力の育成のために、本校が作成した「教科学習での問題解決プロセス」「縦割り創造活動での問題解決プロセス」を意識した授業づくりを行うことが必要だと捉える。

○　縦割り創造活動と社会科を中心とした教科学習との接続を図る（教科等横断的な視点）ことで、子どもの学びが深まった。主権者教育に関わる内容相互の関連を図るという視点に目を向けていくことが大切である。

**課　題**

○　小学校社会科学習を柱として、縦割り創造活動との関連をさらに明確化した上で、実践を行うことが必要であり、社会科を柱とした学習プログラムの開発へと方向性を転換していく。また、児童アンケートにおいても、子どもの回答は縦割り創造活動という視点が中心であったため、縦割り創造活動だけでなく教科学習（社会科）を踏まえてのアンケート項目になるように変更することが必要である。

○　本校が作成した「教科学習での問題解決プロセス」「縦割り創造活動での問題解決プロセス」を意識した授業づくりについては、今後もこのようなプロセスを踏まえた授業づくりを行うことで、付加・修正を行っていくことが大切である。付け加えて、カリキュラム構想案をもとに実践を行い、付加・修正を加えることにより、カリキュラム構想案を精緻化し、今後の主権者教育を踏まえた社会科の在り方についてまとめていくことも必要だと考える。

○　主権者教育に関わる人材活用を、教育課程上にどのように位置付けるかを明確にしていくことが必要である。

○　実社会とのつながりを担う役割を、どう組織化していくかを考える必要がある。そのためにも、香川大学との連携や保護者・地域との連携を積極的に行い、教員ができるだけ負担のかからないような連携の方法を模索していくことも、今後は大切である。